

菅谷村前遺跡

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2019

高崎市教育委員会
有限会社 毛野考古学研究所

菅谷村前遺跡

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2019

高崎市教育委員会
有限会社 毛野考古学研究所

例 言

1. 本書は宅地造成工事に伴う菅谷村前遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本遺跡は群馬県高崎市菅谷町字村前779番地、886番地に所在している。
3. 本調査及び整理作業は、土地所有者・大和ハウス工業株式会社群馬支社・高崎市教育委員会・有限会社毛野考古学研究所が協定を締結し、高崎市教育委員会の指導のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
4. 発掘調査から整理作業を経て本書刊行に至るまでの経費は、土地所有者及び大和ハウス工業株式会社群馬支社に負担していただいた。
5. 発掘調査は、宮本久子・春里桃子（有限会社毛野考古学研究所）が担当し、遺構測量・空中写真撮影を小出拓磨（同）が行った。
6. 発掘調査と整理作業は、平成30年10月22日から令和元年5月31日までの期間で実施した。
7. 本遺跡は高崎市教育委員会の遺跡番号で「750」である。
8. 本書の執筆は、Ⅰを高崎市教育委員会、Ⅱ～Ⅵを春里桃子が担当し、編集を春里が行った。遺物については、写真撮影を井上太（有限会社毛野考古学研究所）、実測図・観察表作成を浅間陽（同）が担当した。
9. 本書に係る資料は高崎市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査・整理作業に携わった方々は以下の通りである。
【発掘調査】岡庭秋男 小嶋明子 勅使川原幸枝 永井述史 萩原秀子 【整理作業】石原理久子 磯洋子 樺澤美枝 合田幸子 関小百里 武士久美子 深谷道子 舩田光代 山下奈都子
11. 発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の機関・諸氏にご協力を賜りました。記して感謝を申し上げます。（敬称略・順不同）
大和ハウス工業株式会社群馬支社 金子ハウス 有限会社スミヤ測量 伊藤明宏 三浦京子

凡 例

1. 挿図中の北方位は座標北を、断面図の水準数値は海拔標高を示す。座標は世界測地系を用いている。
2. 遺構略称は、堅穴建物跡：SⅠ、溝：SD、土坑：SK、ピット：Pとした。なお、同一遺構内に付属する土坑に関してはSⅠ-1、SK-1などと表記した。
3. 本書掲載の第1図は高崎市発行1/2,500『高崎市都市計画基本図』、第3図は国土地理院発行1/25,000『前橋』『下室田』を一部引用し、改変した。また、第3図の遺跡範囲は『菅谷遺跡群1』（田辺2015）に基づくものである。
4. 本書ではテフラ（火山噴出物）の呼称として次の略号を用いる。
As-B：浅間B軽石（天仁元年：1108年）、Hr-F A：榛名ー二ツ岳沢川テフラ（6世紀初頭）、As-C：浅間C軽石（3世紀末）、As-Y P：浅間ー板鼻黄色軽石（約14,000年前）
5. 遺構および土器の色調観察は『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所監修 2014年36版）に準拠した。
6. 遺構図の縮尺は全体図を含め1/60を基本とし、カマドに関しては縮尺1/30とした。遺物実測図の縮尺は1/3・1/4として、遺物写真も同様の縮尺とした。
7. 本文中や表における遺構の計測値は、残存値を（ ）、推定値を[]で表記した。

目 次

例言・凡例	1. 遺跡の概要	7
目次・図版目次・表目次・写真図版目次	2. 堅穴建物跡	7
I 調査に至る経緯	3. 溝跡	9
II 地理的・歴史的環境	4. 土坑	9
1. 地理的環境	5. ビット	9
2. 歴史的環境	6. 遺構外出土遺物	10
III 調査の方法と経過	VI まとめ	10
1. 調査の方法	写真図版	
2. 調査の経過	報告書抄録	
IV 基本層序	奥付	
V 検出された遺構と遺物		

図版目次

第1図 調査区位置図	1	第7図 SI-1 (2)・SI-2 (1)	12
第2図 遺跡の位置	2	第8図 SI-2 (2)・SI-3・SI-4 (1)	13
第3図 周辺の遺跡	4	第9図 SI-4 (2)・SD-1 (1)	14
第4図 基本層序	5	第10図 SD-1 (2)・SK-1	15
第5図 調査区全体図	6	第11図 出土遺物 (1)	15
第6図 SI-1 (1)	11	第12図 出土遺物 (2)	16

表目次

第1表 ビット一覧表	17	第3表 出土遺物観察表 (2)	18
第2表 出土遺物観察表 (1)	17		

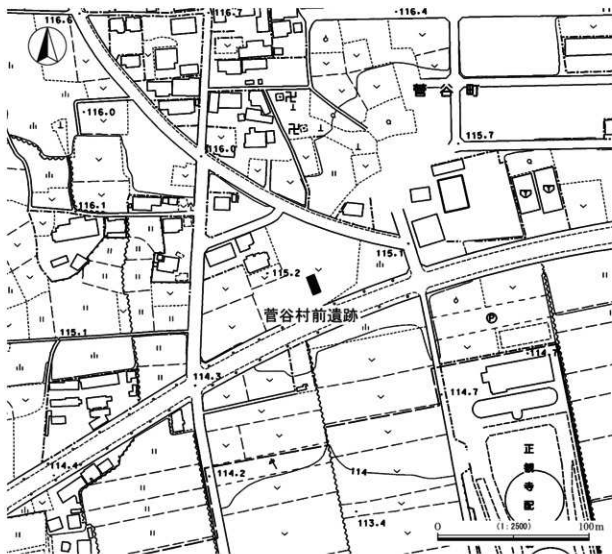
写真図版目次

P.L. 1 調査区全景 調査区全景	SI-2_SK-1 全景 SI-2_SK-2 全景 SI-2 掘り方白色粘土検出状態 SI-2 白色粘土断面B-B'
P.L. 2 SI-1・SI-4 全景 SI-1 遺物出土状態全景 SI-1・SI-4 掘り方全景 SI-1 遺物出土状態近景 SI-1 新カマド全景 SI-1 新カマド構築材検出状態 SI-1 旧カマド掘り方全景 SI-1 貯蔵穴全景	P.L. 4 SK-1 全景 基本層序B 出土遺物 (1) 出土遺物 (2)
P.L. 3 SI-2 全景・遺物出土状態	

I 調査に至る経緯

平成30年7月、土地所有者と大和ハウス工業株式会社群馬支社から、高崎市菅谷町において計画している宅地造成工事に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である菅谷遺跡群内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年7月27日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書が提出され、同年9月20日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、平安時代の集落跡を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「菅谷村前遺跡」とした。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成30年10月12日に土地所有者と民間調査機関有限会社毛野考古学研究所との間で契約を締結し、同日に大和ハウス工業株式会社群馬支社と有限会社毛野考古学研究所との間でも契約を締結した。その後、平成30年10月15日に土地所有者・有限会社毛野考古学研究所・市教委での三者協定を締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。



第1図 調査区位置図

Ⅱ 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

菅谷村前遺跡は、群馬県高崎市菅谷町字村前に所在する。菅谷町は高崎市北東部に位置し、北西方向に榛名山、北東方向に赤城山を望む。

本遺跡は、火山山麓扇状地である相馬ヶ原扇状地の扇端部に立地する。相馬ヶ原扇状地は、榛名山の山体崩壊に伴う「陣場砂層なだれ」の発生（約1.6万年前）に由来するものであり、A s-Y P 降灰（約1.4万年前）までの間に扇状地の大部分が形成されたと考えられている（早田1990）。また、相馬ヶ原扇状地の扇央部から扇端部では、A s-Y P の降灰後に河川性の堆積物が認められる¹。この直下で諸磯 b・諸磯 c・十三菩提式の土器を含む遺物包含層が検出されていることから、縄文時代前期末葉頃に相馬ヶ原扇状地の形成がほぼ終了したことが指摘されている（伊藤2018）。その後扇状地では、地形の傾斜に沿って南東方向に流下する中小河川が発達し、扇頂部や扇端部で谷底平野が形成された。本遺跡周辺では北東に染谷川、西に天王川が流下するほか、既存の調査で埋没河川（谷）の存在が明らかとなっており²、これらの河川が形成する谷地形が、帯状を呈する微高地と入り組む様相となっ



第2図 遺跡の位置

ている。本遺跡は、谷地形に隣接する微高地の縁辺部に位置し、標高は現地表で約115mを測る。遺跡地周辺の現況は南方の低地に水田が広がる一方で、近年まで畑地として用いられてきた菅谷町南部の微高地では宅地化が進んでいる。

2. 歴史的環境

上述した通り、本遺跡周辺は相馬ヶ原扇状地を基盤とする地形に立地しており、縄文時代早期以前の遺跡はほとんどみられず、縄文時代を通じて遺跡の数も少ない。また、弥生時代や古墳時代の集落は小規模なものが多く、奈良・平安時代以降に集落域が拡大する傾向がある。したがって、本遺跡に関わる奈良・平安時代～中世までの概要を記す。

【奈良・平安時代】

本遺跡の約2km北東にあたる前橋市元総社町は上野国府推定城（62）となっており、その周辺地域である染谷川と天王川に挟まれた扇状地上では、谷地形沿いの微高地に集落が分布する傾向がある。

本遺跡が立地する菅谷町周辺の微高地では、8世紀の住居跡は少なく、9世紀から10世紀において住居数が増加する。9世紀～10世紀代の住居跡を中心とする遺跡として、菅谷遺跡（6）や菅谷高畑遺跡1（2）、菅谷石塚Ⅱ遺跡（12）、菅谷万年貝戸遺跡（10）などが挙げられ、菅谷高貝戸遺跡1（4）や菅谷・村東遺跡（7）では、それぞれ100軒以上の住居跡が検出されている。菅谷高貝戸遺跡1は、8世紀代の住居跡が数軒であるのに対して、9世紀代の住居跡は100軒を越える。9世紀代の住居跡には、八花鏡が出土した住居跡や壁立建物と推定される住居跡が含まれる。また、住居跡を区画したとみられる同時期の溝が複数検出されている。菅谷・村東遺跡も8世紀後半の住居跡が数軒であるのに対して、9世紀後半から10世紀前半の住居跡が総数の半分以上を占めている。また南方に目を向けると、正観寺遺跡群（15）や正観寺弁財遺跡（20）、小八木志貝戸遺跡（21）、中尾遺跡（50）で微高地上に当該期の集落が展開する。小八木志貝戸遺跡では、

8世紀第2～第3四半期の掘立柱建物群や、居宅の可能性のある区画溝が検出された。さらに、本遺跡の北西では棟高遺跡群(23)や棟高辻久保遺跡(24)、北東では引間六石遺跡(28)や引間松葉遺跡(38・39)、塚田中原遺跡(32・33)、塚田村東遺跡(34・35・36・37)、塚田村前遺跡(30・31)などで8世紀代～10世紀代の住居跡が多数検出されており、概ね9世紀後半以降に住居数が増加する傾向がある。このうち棟高遺跡群は、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて集落の継続性が認められ、遺跡群内の棟高水窪Ⅱ遺跡では、9世紀前半の鍛冶遺構から瓦片が出土している。

当該期の流通に関わる遺構としては、東山道駅路の存在が注目される。本遺跡の南方では、発掘調査によって寺ノ内遺跡、御布呂遺跡、熊野堂遺跡、西浦南遺跡(58)、福島飛地遺跡(59)、菅谷石塚遺跡(11)、正観寺遺跡群O区(17)、高貝戸遺跡(5)、鳥羽遺跡(49)等で道路状遺構が検出されており、これらが東山道「国府ルート」と推定されている³。このうち高貝戸遺跡において、9世紀中頃の住居跡を掘り込んで道路状遺構が確認されていることから、「国府ルート」は9世紀後半以降に成立したと考えられている(若狭1987)。また、本遺跡の周辺では東山道に關係する可能性がある遺物が見つかり、菅谷高貝戸遺跡1(4)や菅谷遺跡(6)から「路」と墨書された土器が出土した。

生産域は水田跡の調査例が多く、本遺跡周辺では帯状の微高地に隣接する谷地形に展開する。菅谷石塚遺跡では、調査区南側を中心にA s-C混土下水田・H r-F A下水田・A s-B下水田が検出され、継続した土地利用が捉えられる。これに隣接する正観寺西原遺跡(18)のほか、小八木志貝戸遺跡(21)、正観寺遺跡群(15)、正観寺八木境遺跡(19)、棟高辻久保遺跡でもA s-B下水田が検出され、生産域の広がりが認められる。また、本遺跡南方では平坦で広大な低地に条里制水田が検出されている。日高遺跡・史跡日高遺跡(51)ではA s-B下から坪大畦畔による条里方眼の区画が確認された。このほか生産域として、A s-Bで埋没する畠跡が挙げられ、塚田中原遺跡(32)や塚田村東Ⅳ遺跡(37)でそれぞれ検出されている。

【中世】

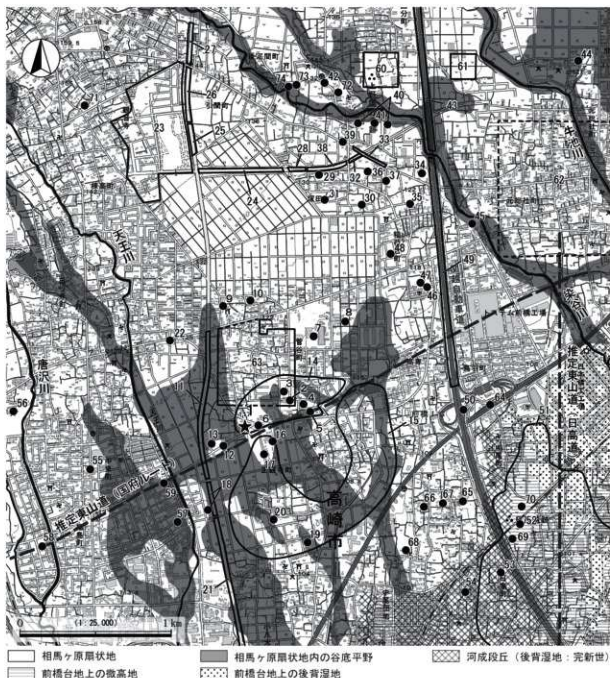
本遺跡周辺では、14世紀～16世紀に築城された城跡・館跡が確認されている。14世紀代のものとしては、中尾城(65)、中尾所之免遺跡(66)、中尾村東館址(70)、鳥羽遺跡が挙げられる。中尾城は東西130m、南北130mの本郭が推定されている。鳥羽遺跡では、二重の堀を巡らせた「回」の字形の館跡が確認され、14世紀から15世紀に機能していたと推定されている。16世紀代のものとしては、本遺跡周辺で菅谷城(63)、本遺跡南方で金尾城(64)、黒崎屋敷(67)、小八木新井屋敷(68)、上日高屋敷(69)が挙げられる。菅谷城は、上杉家文書『関東幕注文』や『菅谷福田家文書』に記述がみられ、長野吉業が築城したと伝えられる。築造年代は具体的には明らかでないものの、少なくとも16世紀には城が存在したと推定されている(山崎1972)。菅谷町字堀之内地内周辺では、北側や東側で堀跡や土居による一辺50mの正方形区画がみられ、本郭であると想定されている。またこのほか、西側で大外廓の堀跡が確認されている。

生産域としては菅谷石塚遺跡が挙げられ、標高の高い北側を中心に中世～近世の畠跡が見つかり、

墓域は、小八木志貝戸遺跡で約100基の墓群(火葬跡・集石墓・土坑墓等)が検出された。また、墓群の南側で居館とみられる濠・溝跡や幹線道路状遺構が確認され、当該期における土地利用の一端が窺われる。

注

- 1 相馬ヶ原扇状地堆積物上部と呼ばれる(早田2018)。この堆積物は、利根川右岸の元総社地域を中心にみられる「総社砂層」に相当するものである。
- 2 『菅谷石塚遺跡』(神谷・楢崎2003)、『菅谷・村東遺跡』(宮田・吉田2011)、『棟高遺跡群 棟高水窪Ⅱ・棟高辻の内Ⅳ遺跡』(田辺2008)でそれぞれ埋没谷が報告されている。
- 3 東山道駅路は、『推定東山道』(若狭1987)及び『日本古代道路事典』(古代交通研究会2004)を引用・参考した。



1. 菅谷村前遺跡 2. 菅谷高畑遺跡1 3. 菅谷高畑遺跡2 4. 菅谷高貝戸遺跡1 5. 高貝戸遺跡 6. 菅谷遺跡
7. 菅谷・村東遺跡 8. 菅谷・村東遺跡4 9. 菅谷中西遺跡 10. 菅谷万年貝戸遺跡 11. 菅谷石塚遺跡
12. 菅谷石塚Ⅱ遺跡 13. 菅谷古墳群 14. 菅谷遺跡群 15. 正観寺遺跡群 16. 正観寺諏訪廻遺跡
17. 正観寺遺跡群Ⅰ区 18. 正観寺西原遺跡 19. 正観寺八木坂遺跡 20. 正観寺弁財遺跡 21. 小八木志貝戸遺跡
22. 棟高東弥三郎街道遺跡 23. 棟高遺跡群 24. 棟高辻久保遺跡 25. 西三社免遺跡 26. 小池遺跡 27. 諏訪西遺跡
28. 引間六石遺跡 29. 塚田の場遺跡 30. 塚田村前遺跡 31. 塚田村前Ⅱ遺跡 32. 塚田中原遺跡
33. 塚田中原遺跡Ⅰ区 34. 塚田村東遺跡 35. 塚田村東Ⅱ・稲荷台村北遺跡 36. 塚田村東Ⅲ遺跡 37. 塚田村東Ⅳ遺跡
38. 引間松葉遺跡 39. 引間松葉遺跡Ⅲ区 40. 国分寺参道遺跡 41. 元総社西川遺跡 42. 後定間遺跡
43. 上野国分寺・尼寺中間地域遺跡 44. 総社甲稲荷塚大道西遺跡 45. 弥勒遺跡 46. 稲荷台北金尾遺跡
47. 稲荷台北金尾遺跡2 48. 稲荷台村南遺跡 49. 鳥羽遺跡 50. 中尾遺跡 51. 日高遺跡・史跡日高遺跡
52. 上日高町山谷遺跡 53. 日高中堀添遺跡 54. 中尾村前遺跡 55. 権現原遺跡 56. 中林遺跡 57. 諸口遺跡
58. 西浦南遺跡 59. 福島飛地遺跡 60. 国分僧寺跡 61. 国分尼寺跡 62. 上野国府推定城 63. 菅谷城 64. 金尾城
65. 中尾城 66. 中尾所之免遺跡 67. 黒崎屋敷 68. 小八木新井屋敷 69. 上日高屋敷 70. 中尾村東館址
71. 棟高平石遺跡 72. 引間妙見遺跡 73. 引間古屋敷 74. 後定間元屋敷遺跡

第3図 周辺の遺跡

III 調査の方法と経過

1. 調査の方法

発掘調査では、試掘調査の結果に基づいてバックホー0.25㎡により表土掘削をした。その後、ジョレン・移植ゴテ等を使用し、人力で遺構確認と掘削を行った。遺構調査では、必要に応じて土層観察用のベルトを設定し、埋没状態を確認した。遺構の測量は、平面図はトータルステーションを用い、断面図は手実測で作成した。測量に用いた基準点は、GNSSによる観測で設置し、座標は世界測地系を使用した。遺構写真は、35mmモノクロネガフィルム・35mmカラーリバーサルフィルム・デジタル一眼レフカメラNikonD5500（2416万画素）を使用し、遺跡全体はドローン（Dji Phantom3）により空中写真撮影を実施した。

整理作業では、遺構図面の修正を行い、第二次原図を作成した。出土遺物は、水洗・注記後に溶剤系接着剤（セメダインC）を使い接合し、エポキシ系樹脂（パイサム）を用いて欠損部分を補強した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラNikonD750で撮影をした。遺構図及び遺物実測図トレース、版組はAdobe Illustrator CS6、写真加工はAdobe Photoshop CS6を使用した。

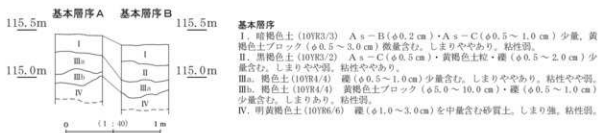
2. 調査の経過

発掘調査は、平成30年10月22日～11月9日の間に行った。10月22日：重機搬入。仮設トイレの設置。23日：表土除去を行い、完了後に重機搬出。24日：基準点設置。31日：発掘器材搬入。発掘補助員動員。遺構確認後、遺構掘削作業を開始。11月1日：遺構掘削及び遺構記録作業を継続する。6日：雨天のため現地調査を中止する。8日：清掃作業後、調査区の空掘を実施。9日：遺構掘削及び遺構記録作業を完了。高崎市教育委員会による現地調査の終了確認。発掘器材撤収。

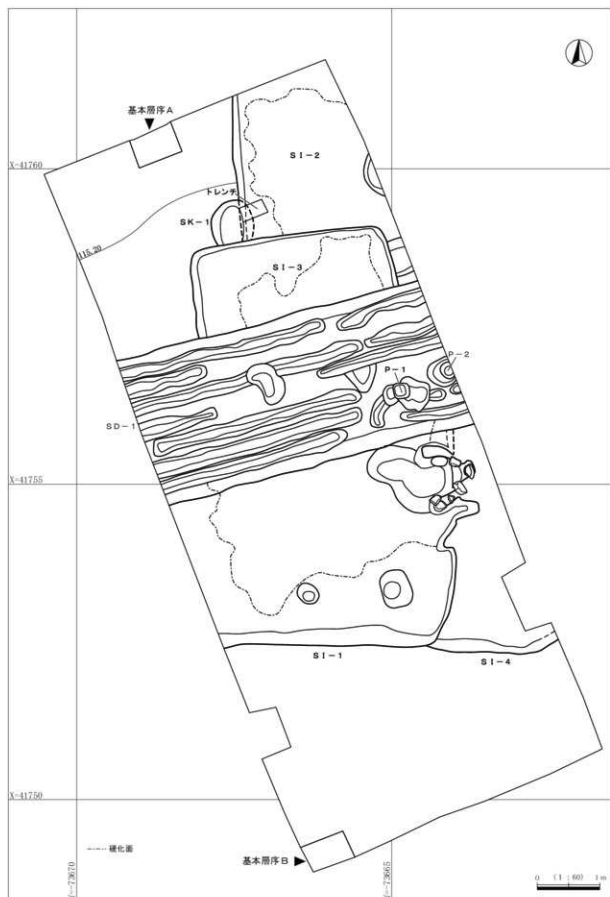
整理作業は、平成30年11月22日～令和元年5月31日の間に行った。11月期：遺構記録の基礎整理。12月期：第二次原図の作成を開始。1月期：遺物の水洗・注記。2月期：遺物の接合・復元・写真撮影。3月期：遺物写真の加工。4月期：第二次原図の作成を終了。遺物の実測・採拓。遺構図及び遺物実測図のトレース。報告書掲載図版の作成、原稿の執筆・編集。5月期：報告書の入稿・校正・印刷・製本・刊行。

IV 基本層序

基本層序は、調査区北壁と南壁で確認した。I層はA s-Bを含む表土である。奈良・平安時代の土器細片を多く含むことから、後世に遺構が攪拌されたと想定される。II層はA s-Cを含む黒褐色土であり、調査区南側でのみ検出された。III層は礫を少量含む褐色土で、IV層に由来する黄褐色土の含有によってIII a層とIII b層に細別した。IV層は明黄褐色土砂質土で、周辺遺跡の調査から、相馬ヶ原扇状地の形成に伴う堆積層であると考えられる。本遺跡は、I層の表土直下で遺構を検出したが、調査区の南北で層位が異なることから、南側はII層上面、北側はIII a層上面を遺構の確認面とした。



第4図 基本層序



第5図 調査区全体図

V 検出された遺構と遺物

1. 遺跡の概要

本遺跡では、基本層序Ⅱ層上面及びⅢa層上面を遺構確認面として調査を行い、古墳時代～平安時代の土坑1基と平安時代の堅穴建物跡4軒、A s-B降下以降の溝1条、時期不明のビット2基を検出した。

2. 堅穴建物跡

S I-1（遺構：第6・7図／P.L. 2、遺物：第11・12図／第2・3表／P.L. 4・5）

位置：X=41750～41760、Y=-73660～-73670。主軸方位：N-90°-E。重複：S I-4、S D-1と重複する。土層断面と出土遺物の観察から、本堅穴建物跡はS I-4より新しく、S D-1より古い。平面

形態：平面規模の一部が調査区外に及ぶ。検出範囲から、方形状ないし長方形状を呈するものと想定される。

規模：(4.25) m × (3.34) m。残存深度：確認面から44cm。カマド：東壁に新田2基のカマドが付設される。

新カマドは、左右の袖芯材に自然礫を用いている。原位置を保つ自然礫は右袖で3石、左袖で1石確認され、

煙道入口付近に位置する左右の礫は横断面が「ハ」の字状となる。右袖は、自然礫に灰黄褐色土（カマド覆

土7層）を被覆することによって構築されている。左袖は、灰黄褐色土（カマド覆土6層）の上部に灰白色

粘土（カマド覆土5層）の使用が明瞭にみられる。また、燃焼部底面の左袖側で、構築材の抜き取り痕とみ

られるビット1基のプランを検出した。煙道部では、構築材として土師器甕（17）が確認された。掘り過ぎ

のため層位や構造は明らかでないが、逆位の状態で埋設されていたと考えられる。旧カマドは新カマドの南

側に隣接し、掘り方調査時に検出された。旧カマドの痕跡として、煙道が確認され、覆土から焼土を検出した。

また、右袖と想定される部分が残存しており、袖の基部にあたとみられる。貯蔵穴：堅穴南東コーナー付

近に位置し、隅丸長方形状を呈する。規模は0.59m × 0.47m、床面からの深さ33cmを測る。柱穴：ビットが

1基（P 1）検出され、規模は0.36m × 0.29m、床面からの深さ22cmを測る。位置関係から、主柱穴となる

可能性は低い。床面の状態：貼床は黒褐色土を主体とする。また、土層断面図の記録はないが、西壁付近で

は黄褐色土が床面となる部分がある。床面の大部分は硬くしまっているが、壁面付近や貯蔵穴周辺はしまり

が弱い。底面の標高は、堅穴北西側から南東側へ緩やかに低くなる。さらに掘り方調査で、カマド周辺のみ

古い貼床が確認されている。遺構埋没状態：A s-C・焼土粒・黄褐色土を含む暗褐色土と灰黄褐色土を主

体とする。含有物の粒径が細かく、概ね均一に堆積することから、自然埋没と想定される。カマド周辺の覆

土には直径1cm程の焼土ブロックや炭化物が含まれ、カマドの崩落に由来すると考えられる。掘り方：全体

的に掘り込まれており、堅穴中央から北西側にかけて底面が高くなる。これに対して堅穴周縁の低い部分は、

ビット状の掘り込みがみられるなど、凹凸が顕著である。なお掘り方調査時は、S I-4と同時に貼床を掘

削したため、立ち上がりは検出できなかった。遺物出土状態：覆土中や床面直上から土師器杯・甕、須恵器

杯・高台付埴・皿・甕、灰釉陶器皿・埴、鉄製品（刀子・鎌・釘）、磨石が出土し、須恵器杯や高台付埴の

出土量が多い傾向がある。カマドを中心に残存状態の良い遺物が多く確認されている。カマド左袖先端付

近の床面直上では、正位の須恵器杯（4）と須恵器高台付埴（7）が近接して出土し、7の上には灰釉陶器

皿（14）が同じく正位で重ねられた状態であった。さらに、カマド左袖周辺の覆土下層では、正位の須恵器

高台付埴（9）と須恵器杯2点（5・6）が出土した。このほかカマド周辺では、床面直上に正位の須恵

器皿（12・13）、覆土下層にて正位で潰れた状態の高台付埴（8）が出土した。同じく覆土下層から出土し

た10・11の高台付埴は、いずれも底部のみが残存し、高台を上に向けた状態で出土した。貯蔵穴では底面が

らやや浮いて磨石(19)が出土している。時期：出土遺物と重複関係から、平安時代(9世紀後半)に帰属すると考えられる。

SI-2 (遺構：第7・8図／PL. 3、遺物：第12図／第3表／PL. 5)

位置：X=41755~41765、Y=-73660~-73670。**主軸方位：**不明。**重複：**SI-3、SD-1、SK-1と重複する。土層断面と出土遺物の観察から、本堅穴建物跡はSK-1より新しく、SI-3、SD-1より古い。**平面形態：**平面規模の一部が調査区外に及ぶ。検出範囲から、方形状ないし長方形を呈するものと想定される。**規模：**(2.64)m×(2.29)m。**残存深度：**III a層上面から34cm。**付属施設：**調査区東壁寄りの床面上で土坑が2基検出された。SI-2_SK-1は、円形ないし楕円形を呈すると想定される。規模は(0.70)m×(0.21)m、床面からの深さは29cmを測る。壁面から底面のほぼ全体に白色粘土が貼り付けられていることが確認された。また底面では、直径10cm程のピットが検出されているが、性格は不明である。SI-2_SK-2は、方形状ないし長方形を呈すると想定される。規模は(0.59)m×(0.28)m、床面からの深さは20cmを測る。位置関係から貯蔵穴の可能性がある。**床面の状態：**貼床は褐灰色土を主体とするが、壁付近ではいぶい黄褐色土(覆土20層)が床面となる部分がある。表面には僅かな凹凸がみられ、硬くしまっている。**遺構埋没状態：**A s-C・黄褐色土ブロック・焼土粒・炭化粒を含む褐灰色土を主体とする。含有物の粒径が細かく、概ね均一に堆積することから、自然埋没と想定される。**掘り方：**全体的に掘り込まれ、底面に凹凸がみられる。また底面の約66cm×約60cmの範囲で、厚さ約12cmを測る灰白色粘土の塊が検出されており、近接するSI-2_SK-1やSI-2_SK-2との関連性が想定される。**遺物出土状態：**覆土中から土師器杯・甕、須恵器杯の破片が少量出土した。床面直上の遺物としては、須恵器杯(1)が挙げられる。**時期：**出土遺物と重複関係から、平安時代(9世紀後半)に帰属すると考えられる。

SI-3 (遺構：第8図／PL. 3、遺物：第12図／第3表／PL. 5)

位置：X=41755~41760、Y=-73660~-73670。**主軸方位：**不明。**重複：**SI-2、SD-1、SK-1と重複する。土層断面と出土遺物の観察から、本堅穴建物跡はSK-1、SI-2より新しく、SD-1より古い。**平面形態：**検出範囲から、方形状ないし長方形を呈するものと想定される。**規模：**3.23m×(1.39)m。**残存深度：**確認面から25cm。**床面の状態：**貼床は黒褐色土を主体とする。表面は概ね平坦で、硬くしまっているが、壁付近ではしまりが弱い。**遺構埋没状態：**A s-C・焼土粒・炭化物・灰を含む黒褐色土を主体とする。含有物の粒径が細かく、概ね均一に堆積することから、自然埋没と想定される。**掘り方：**全体的に凹凸がみられ、堅穴コーナー付近が低くなる。**遺物出土状態：**覆土中から土師器杯・甕、須恵器杯・甕、灰釉陶器の破片が少量出土した。土師器杯と須恵器杯の中には墨書のあるもの(3・4)が含まれる。床面に近い覆土下層では、須恵器高台付埴(2)が出土している。**時期：**出土遺物と重複関係から、平安時代(9世紀後半)に帰属すると考えられる。

SI-4 (遺構：第8・9図／PL. 2、遺物：第12図／第3表／PL. 5)

位置：X=41750~41760、Y=-73660~-73665。**主軸方位：**不明。**重複：**SI-1、SD-1と重複する。土層断面と出土遺物の観察から、本堅穴建物跡が最も古い。**平面形態：**平面規模の一部が調査区外に及ぶ。検出範囲から、方形状ないし長方形を呈するものと想定される。**規模：**(3.59)m×(1.84)m。**残存深度：**II層上面から40cm。**床面の状態：**貼床は褐灰色土を主体とする。表面には凹凸がみられ、全体的に硬くしま

っている。また堅穴南東の壁際では、床面上で窪みが検出された。この窪みは、床面検出時にプランを確認できず、掘り方の土層断面観察によって床面から掘り込まれていることを確認した。そのため、掘り方平面図にのみ図示する。**遺構埋没状態**: A s - C・焼土ブロック・黄褐色土ブロック・灰白色粘土・灰を含む褐色灰色土を主体とする。含有物の粒径が細かく、概ね均一に堆積することから、自然埋没と想定される。**掘り方**: 全体的に凹凸がみられる。床下土坑が1基(SI-4、SK-1)検出され、規模は1.10m×(0.83)m、掘り方底面からの深さ27.4cmを測る。同土坑は、埋没土に黄褐色土ブロック・灰を中量、焼土ブロック・炭化物・灰白色粘土ブロックを少量含み、人為埋没と想定される。**遺物出土状態**: 覆土中から土師器杯・甕、須恵器杯の破片が少量出土した。土師器杯の中には墨書のあるもの(2)が含まれる。床面直上の遺物として、鉄釘(4)が挙げられる。**時期**: 出土遺物と重複関係から、平安時代(9世紀後半)に帰属すると考えられる。

3. 溝跡

SD-1 (遺構: 第9・10図/PL. 3)

位置: X=41750~41760、Y=-73660~-73670。**主軸方位**: N-75°-E。**重複**: SI-1、SI-2、SI-3、SI-4、P-1、P-2と重複する。土層断面と出土遺物の観察から、本溝が最も新しい。**規模**: 上端幅2.37m~2.46m、下端幅1.91m~2.10m。**残存深度**: 確認面から55cm。**断面形態**: 土層断面の観察から、5条以上の溝が重複すると判断される。このため断面形態は場所によって異なるが、逆台形状、不整形の弧状、皿状などを呈する。**底面の状態**: 重複する5条のうち4条は北から南へ場所をずらしながら掘り直しが行われたとみられ、底面では、これに伴う凹凸が顕著である。**遺構埋没状態**: 重複する5条の覆土全てにA s - Bが含まれる。砂粒の混入や鉄分の沈着など、流水の痕跡は認められない。黄褐色土ブロックを多量~少量含む暗褐色土と灰黄褐色土により埋め戻されたとみられ、人為埋没と想定される。**遺物出土状態**: 覆土中から土師器杯・甕、須恵器杯・高台付甕、灰釉陶器碗、緑釉陶器残塊、軟質陶器、施釉陶器、硯とみられる石製品の破片が出土している。このうち土師器や須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器は、重複する堅穴建物跡の遺物である可能性が高い。施釉陶器や軟質陶器、硯は本溝に伴う可能性があるが、小破片のため図示し得ない。**時期**: 土層断面の観察と出土遺物から、A s - B降下以降~A s - A降下以前に帰属すると考えられる。

4. 土坑

SK-1 (遺構: 第10図/PL. 4)

位置: X=41755~41760、Y=-73665~-73670。**重複**: SI-2、SI-3と重複する。土層断面と出土遺物の観察から、本土坑が最も古い。**規模**: (0.68)m×[0.67]m。**残存深度**: 確認面から23cm。**平面形態**: 楕円形を呈すると想定される。**断面形態**: 逆台形ないし皿状を呈すると想定される。**遺構埋没状態**: A s - C・黄褐色土粒を含む黒褐色土を主体とし、埋没要因は不明である。**遺物出土状態**: 遺物は出土しなかった。**時期**: 土層断面の観察と重複関係から、古墳時代~平安時代に帰属すると考えられる。

5. ビット (遺構: 第9図/第1表)

ビットは2基確認され、いずれもSD-1底面で検出した。P-1は覆土にA s - Bを含むが、SD-1との新旧関係は不明である。P-2は覆土にA s - Bを含まないことから、SD-1より古いと判断される。なお現地調査段階では、SD-1や同溝と重複する堅穴建物跡のビットとなる可能性があったが、明確な関連性が認められなかったため、単独遺構として報告する。

6. 遺構外出土遺物（遺物：第12図／第3表／PL. 5）

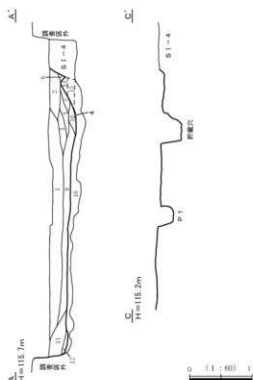
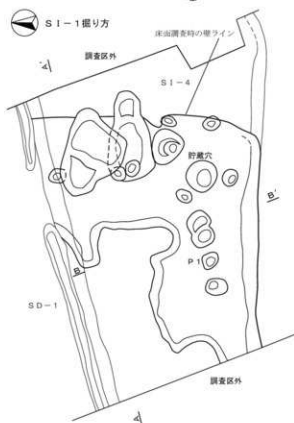
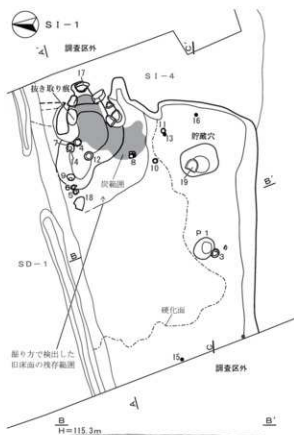
本節では、調査区一括遺物や、出土した遺構と明らかに帰属時期が異なる遺物を遺構外出土遺物として扱い、このうち2点を掲載した。1は土師器杯の破片で、内外面に墨書がみられるが、細片のため判読はできなかった。2は緑釉陶器の稜境とみられる破片で、SD-1 覆土上面から出土した。

VI まとめ

本遺跡では、9世紀後半に帰属する4軒の堅穴建物跡が検出された。SI-1は、4軒の中で比較的良好に残存しており、床面直上や床面付近から出土した遺物も多い。またカマドも、芯材に使用した礫に原位置をとどめるものが多いなど、人為的な破壊をあまり受けずに残存したものであると考えられる。遺物は、古相を示す刷毛塗りで施釉された灰釉陶器のほか、刀子をはじめとする鉄製品や磨石などが特徴的なものとして挙げられ、このうち磨石は鉄を研ぐために使用された可能性がある。SI-2は、出土遺物や重複関係から、本遺跡の4軒で最も古い可能性がある。また、壁面や底面に白色粘土を貼り付けた土坑を検出した点が他の堅穴建物跡にはない特徴として挙げられる。SI-3及びSI-4は、重複のため具体的な状況は明らかでない。それぞれ覆土から墨書土器の破片が出土しており、堅穴建物跡に伴う可能性がある。このほか、平安時代の遺構には伴わないが、緑釉陶器の破片が出土している点が注意される。本遺跡の堅穴建物跡は、約60㎡の狭い調査区でほぼ同時期に帰属する4軒が検出された点が特筆され、9世紀後半という短期間で頻繁に建物の更新が行われた様子が窺える。また、9世紀代では流通量が限られる灰釉陶器が出土している点（綿貫ほか1992）も特徴として挙げられる。

本遺跡の調査が示すこのような平安時代における集落の様相は、既存の調査でも確認できる。例えば本遺跡から約100m東に位置する菅谷遺跡では、9世紀後半を主体とする堅穴建物跡が5軒検出され、墨書土器が複数出土した（五十嵐・太田1980）。また本遺跡北東に位置する菅谷高貝戸遺跡1では、9世紀代の堅穴建物跡が特定箇所の高い密度で構築され、特に9世紀後半代に重複が顕著であることが報告されている（田辺2015）。本遺跡北西に位置する榎高水窪Ⅱ遺跡でも、9世紀から10世紀の堅穴建物跡で同様の傾向がみられ、丸軀や円面硯、多数の墨書土器が出土したことから、官人や官人に関わる人物の居住が想定されている（田辺2008）。さらに国府推定域の周辺遺跡では、緑釉・灰釉陶器の出土する頻度が高く、皇朝十二銭や丸軀・巡方、八稜鏡、奈良三彩、円面硯や風字硯など官衛的な遺物の出土が目につくとの指摘もある（水谷2011）。

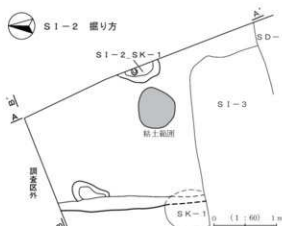
このような周辺遺跡の様相を本遺跡に捉え返すと、堅穴建物跡から出土した9世紀代の灰釉陶器や墨書土器の存在は、集落を営んだ人々の経済的地位を示唆している可能性があり、注目される。こうした遺物が出土する背景としては、本遺跡周辺が国府推定域の周辺部にあたり、東山道「国府ルート」の推定路にも近いことから、人や物の往来が盛んな場所であったことが推測される。さらに本遺跡でみられた堅穴建物跡の重複傾向にも、前述したような周辺環境が関係していると推察されるが、その要因を明らかにするには、今後調査事例の増加を待って詳細な検討を行う必要があろう。以上述べたとおり、本遺跡の調査は国府推定域の周辺で営まれた平安時代集落の一端を明らかにするものであり、既存の調査成果を再確認するものとして捉えられる。



SI-1 A-A'・B-B'土層説明

1. 暗褐色土 (10YR3/4) A s-C (φ0.5~1.0 cm) 多量、焼土ブロック (φ0.2~0.5 cm) 中量、黄褐色土ブロック (φ0.5~2.0 cm)・炭化物少量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
2. 暗褐色土 (10YR3/4) A s-C (φ0.5~1.0 cm)・黄褐色土ブロック (φ0.5 cm)・焼土ブロック (φ0.5 cm) 少量、炭化物微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
3. 暗褐色土 (10YR3/3) A s-C (φ0.5 cm)・焼土粒少量、黄褐色土ブロック (φ0.5~1.0 cm)・炭化物微量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
4. 灰黄褐色土 (10YR4/2) A s-C (φ0.5 cm)・焼土粒少量、炭化粒微量含む。しまり弱。粘性やや弱。
5. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 焼土 (φ0.5~1.0 cm) 中量、A s-C (φ0.5 cm) 少量、炭化物 (φ1.0 cm)・黄褐色土粒・炭化粒微量含む。しまり弱。粘性あり。
6. 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土粒少量、A s-C (φ0.5 cm)・焼土粒微量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
7. 暗褐色土 (10YR3/3) A s-C (φ0.5~1.0 cm)・焼土ブロック (φ0.5~2.0 cm) 中量、黄褐色土ブロック (φ0.5~1.0 cm)・黄褐色土粒少量、炭化物 (φ0.5~3.0 cm) 微量含む。しまりややあり。粘性ややあり。
8. 灰に近い黄褐色土 (10YR4/3) 焼土ブロック (φ0.5~1.0 cm)・黄褐色土ブロック (φ1.0~3.0 cm) 中量、A s-C (φ0.5 cm)・炭化物少量含む。しまりやや弱。粘性やや弱。
9. 黒褐色土 (10YR3/2) A s-C (φ0.5~1.0 cm)・焼土粒・黄褐色土粒少量、炭化粒微量含む。しまりややあり。粘性やや弱。
10. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 焼土粒中量、炭化粒少量、A s-C (φ0.5 cm)・黄褐色土粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
11. 暗褐色土 (10YR3/4) A s-C (φ0.5 cm)・焼土粒・炭 (φ0.5~2.0 cm) 少量、黄褐色土粒微量含む。しまりややあり。粘性やや弱。
12. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 黄褐色土粒・焼土粒・炭化粒微量含む。しまり弱。粘性やや弱。
13. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 黄褐色土粒・焼土粒・炭化粒微量含む。しまり弱。粘性やや弱。
14. 灰褐色土 (5YR4/2) 灰白色粘土 (φ5.0~10 cm) 多量、焼土 (φ0.5~1.5 cm) 中量、A s-C (φ0.5 cm) 少量含む。しまり・粘性ややあり。
15. 灰黄褐色土 (10YR4/2) A s-C (φ0.5 cm) 中量、焼土 (φ1.0 cm)・黄褐色土ブロック (φ0.5~3.0 cm) 少量、炭化物微量含む。しまり・粘性やや弱。
16. 黒褐色土 (10YR3/2) A s-C (φ0.5 cm)・焼土ブロック (φ0.5~2.0 cm)・炭化物・炭 (φ0.5~1.0 cm) 少量、黄褐色土ブロック (φ0.5~3.0 cm)・灰白色粘土ブロック (φ1.0~3.0 cm) 微量含む。しまり強。粘性あり。貼床。

第6図 SI-1 (1)



S1-2 A-A'・B-B' 土層説明

1. 暗褐色土 (10YR3/3) A s-C ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm) 中量, 焼土ブロック ($\phi 0.5$ cm) 少量, 黄褐色土ブロック ($\phi 0.5$ cm) 微量含む。しまりやや弱。粘性やや弱。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) A s-C ($\phi 0.5$ cm)・黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 3.0$ cm) 少量, 焼土粒・炭化物微量含む。しまり弱。粘性やや弱。
3. 灰黄色土 (10YR4/2) 灰白色粘土ブロック ($\phi 1.0 \sim 5.0$ cm) 中量, A s-C ($\phi 0.5$ cm) 少量, 黄褐色土ブロック ($\phi 0.5$ cm)・焼土粒微量含む。しまりやや弱。粘性やや弱。
4. 黒褐色土 (10YR3/2) A s-C ($\phi 0.5$ cm) 少量, 焼土粒・黄褐色土粒・炭化物微量含む。しまり弱。粘性やや弱。
5. 暗褐色土 (10YR3/3) A s-C ($\phi 0.5$ cm)・礫 ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm) 少量, 焼土粒・黄褐色土粒微量含む。しまり弱。粘性やや弱。

6. 暗褐色土 (10YR3/3) A s-C ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm) 中量, 礫 ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm) 少量, 焼土粒・黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 2.0$ cm) 微量含む。しまりやや弱。粘性やや弱。

7. 暗褐色土 (10YR3/3) 礫 ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm) 少量, A s-C ($\phi 0.5$ cm)・黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm)・焼土粒微量含む。しまり弱。粘性弱。

8. 黒褐色土 (10YR3/1) 灰中量, 焼土ブロック ($\phi 0.5 \sim 5.0$ cm) 中量, 黄褐色土ブロック ($\phi 1.0$ cm) 微量含む。しまり弱。粘性あり。

9. 灰黄色土 (10YR4/1) 灰白色粘土 ($\phi 0.5 \sim 3.0$ cm) 中量, 焼土粒少量, 炭化物微量含む。しまり弱。粘性あり。

10. 黒褐色土 (10YR3/1) 灰中量含む。しまり弱。粘性やや弱。カマド由来か。

11. 灰黄色土 (10YR4/2) 黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 3.0$ cm) 中量, A s-C ($\phi 0.5$ cm) 少量, 炭化物・灰白色粘土 ($\phi 2.0$ cm) 微量含む。しまりやや弱。粘性やや弱。S1-2, SK-1 覆土。

12. 灰黄色土 (10YR4/2) A s-C ($\phi 0.5$ cm)・黄褐色土ブロック ($\phi 1.0 \sim 3.0$ cm) 微量含む。しまりやや弱。粘性弱。S1-2, SK-1 覆土。

13. 黒褐色土 (10YR3/1) A s-C ($\phi 0.5$ cm) 微量含む。しまりやや弱。粘性あり。S1-2, SK-1 覆土。

14. 褐灰色土 (10YR6/1) 灰白色粘土を主体とし, 黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm)・焼土 ($\phi 0.5 \sim 2.0$ cm) 中量含む。しまりあり。粘性強。S1-2, SK-1 礫面・底面の灰白色粘土貼り付け。

15. 灰黄色土 (10YR4/2) 焼土ブロック ($\phi 0.5 \sim 3.0$ cm)・灰白色粘土 ($\phi 0.5 \sim 3.0$ cm) 中量, 灰少量, 黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm)・炭化物微量含む。しまりやや弱。粘性やや弱。S1-2, SK-2 覆土。

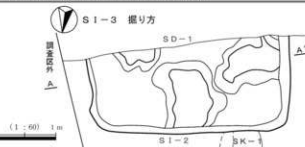
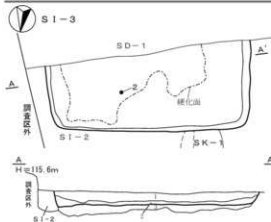
16. 褐灰色土 (10YR4/1) 灰白色粘土 ($\phi 5.0 \sim 10.0$ cm) 中量, 黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 3.0$ cm) 少量, 炭化物微量含む。しまり弱。粘性あり。S1-2, SK-2 覆土。

17. 褐灰色土 (10YR4/1) A s-C ($\phi 0.2 \sim 0.5$ cm) 中量, 焼土粒・炭化粒・黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm) 少量含む。しまり強。粘性やや弱。礫床。

18. 褐灰色土 (10YR5/1) 灰白色粘土 ($\phi 1.0 \sim 3.0$ cm)・焼土ブロック ($\phi 0.5$ cm)・黄褐色土ブロック ($\phi 0.5$ cm)・灰少量含む。しまり弱。粘性やや弱。

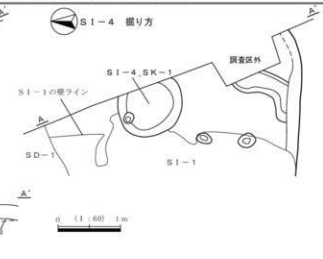
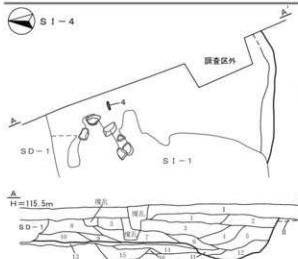
19. 黒褐色土 (10YR2/3) 灰中量, 黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 3.0$ cm) 少量, A s-C ($\phi 0.5$ cm)・灰白色粘土 ($\phi 3.0$ cm) 微量含む。しまりやや弱。粘性やや弱。

20. にふい・黄褐色土 (10YR5/4) 黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 5.0$ cm) 中量, 礫 ($\phi 0.5$ cm) 少量含む。しまり弱。粘性やや弱。



S1-3 A-A' 土層説明

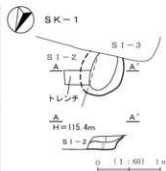
1. 黒褐色土 (10YR3/2) A s-C ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm) 中量, 黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm)・焼土粒・炭化粒少量含む。しまりやや弱。粘性やや弱。
2. 黒褐色土 (10YR3/2) A s-C ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm) 少量, 焼土ブロック ($\phi 0.8 \sim 3.0$ cm)・黄褐色土ブロック ($\phi 0.5$ cm)・炭化粒微量含む。しまりやや弱。粘性やや弱。
3. 黒褐色土 (10YR2/2) A s-C ($\phi 0.5$ cm) 中量, 焼土粒・炭化物少量, 炭化物微量含む。しまり強。粘性やや弱。礫床。



第8図 S1-2 (2)・S1-3・S1-4 (1)

SD-1 C-C' 土層説明

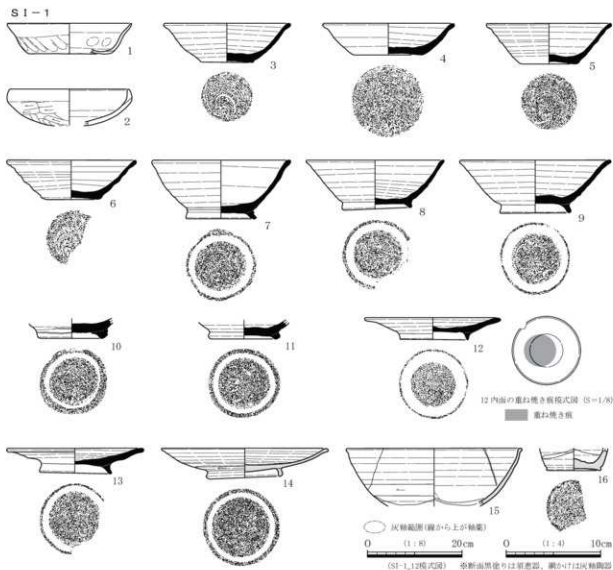
1. 灰黄褐色土 (10YR4/2) A s-B ($\phi 0.2$ cm) 多量, A s-C ($\phi 0.5$ cm)・焼土粒・炭化物微量含む, しまり弱, 粘性弱。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) A s-B ($\phi 0.2$ cm)・A s-C ($\phi 0.5$ cm)・焼土粒・炭化物少量含む, しまりやや弱, 粘性弱。
3. 灰黄褐色土 (10YR4/2) A s-B ($\phi 0.2$ cm) 中量, A s-C ($\phi 0.5$ cm) 少量, 焼土粒微量含む, しまり弱, 粘性弱。
4. 暗褐色土 (7.5YR3/3) A s-B ($\phi 0.2$ cm)・焼土ブロック ($\phi 0.5$ cm) 少量, A s-C ($\phi 0.5$ cm)・黄褐色土ブロック ($\phi 0.5$ cm)・炭化物微量含む, しまりやや弱, 粘性弱。
5. 暗褐色土 (10YR3/3) A s-B ($\phi 0.2$ cm) 中量, A s-C ($\phi 0.5$ cm)・黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm) 少量, 焼土粒・炭化物微量含む, しまりやや弱, 粘性弱。
6. 暗褐色土 (10YR3/3) A s-B ($\phi 0.2$ cm) 少量, A s-C ($\phi 0.5$ cm)・焼土ブロック ($\phi 1.0$ cm)・黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm) 微量含む, しまり弱, 粘性弱。
7. 暗褐色土 (10YR3/3) A s-B ($\phi 0.2$ cm)・礫 ($\phi 0.5 \sim 2.0$ cm) 少量, A s-C ($\phi 0.5$ cm)・黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 3.0$ cm) 微量含む, しまり弱, 粘性やや弱。
8. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 黄褐色土ブロック ($\phi 2.0 \sim 3.0$ cm) 中量, A s-B ($\phi 0.2$ cm) 少量, A s-C ($\phi 1.0$ cm)・焼土ブロック ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm)・灰白色粘土 ($\phi 3.0$ cm)・炭化物微量含む, しまり弱, 粘性弱。
9. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 黄褐色土ブロック ($\phi 1.0 \sim 5.0$ cm) 中量, A s-B ($\phi 0.2$ cm) 微量含む, しまり弱, 粘性やや弱。
10. 灰黄褐色土 (10YR4/2) A s-B ($\phi 0.2$ cm) 少量, 焼土ブロック ($\phi 0.5 \sim 2.0$ cm)・黄褐色土ブロック ($\phi 0.5$ cm)・炭化物微量含む, しまりやや弱, 粘性やや弱。
11. 灰黄褐色土 (10YR4/2) A s-B ($\phi 0.2$ cm)・黄褐色土ブロック ($\phi 2.0 \sim 5.0$ cm) 少量, 焼土ブロック ($\phi 0.5 \sim 2.0$ cm)・炭化物微量含む, しまり弱, 粘性弱。
12. にがい黄褐色土 (10YR5/3) 黄褐色土ブロック ($\phi 1.0 \sim 2.0$ cm) 中量含む, しまり弱, 粘性やや弱, P-2 覆土。
13. 灰黄褐色土 (10YR5/2) 黄褐色土粒少量含む, しまりやや弱, 粘性やや弱, P-2 覆土。



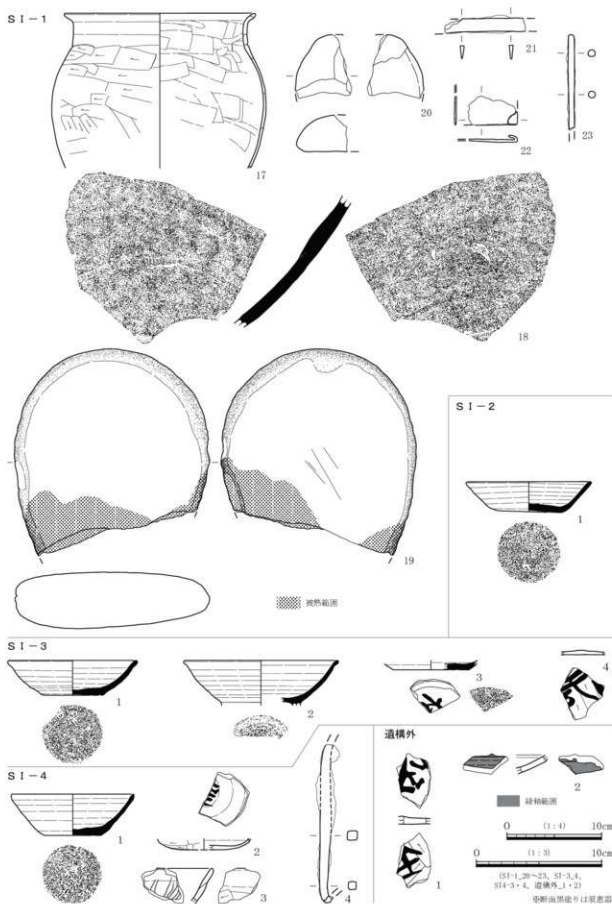
SK-1 A-A' 土層説明

1. 黒褐色土 (10YR3/2) A s-C ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm) 中量, 黄褐色土粒少量含む, しまりやや弱, 粘性やや弱。
2. にがい黄褐色土 (10YR5/4) A s-C ($\phi 0.5$ cm)・黄褐色土ブロック ($\phi 0.5 \sim 3.0$ cm)・礫 ($\phi 0.5 \sim 1.0$ cm) 少量含む, しまりやや弱, 粘性やや弱。

第10図 SD-1 (2)・SK-1



第11図 出土遺物 (1)



第12図 出土遺物(2)

第1表 ビットー一覧表

遺構名	位置	規模 (m)	残存深度 (cm)	平面形態	覆土	遺物
P-1	X = 41755 ~ 41760, Y = -73660 ~ -73665	0.25 × 0.24	46	方形	A × B・黄褐色土ブロックを含む暗褐色土	—
P-2	X = 41755 ~ 41760, Y = -73660 ~ -73665	0.44 × (0.40)	34	円形	黄褐色土粒を含む灰黄褐色土	—

第2表 出土遺物観察表 (1)

遺構名	番号	器種	法量 (cm)	①焼成②色調 ③胎土④残存	成・整形技法の特徴	出土位置	備考
S1-1	1	土師器 坪	口径: [13.2] 底径: [9.0] 器高: 3.2	①酸化焼成 (良好) ②外内: 褐色 ③石英、角閃石、凝灰岩粒 ④1/4	外: ロクロ部外面ヨコナデ。体部外面ナデ後底面のみケズリ。 内: 体部ユビオサエ後ヨコナデ。	覆土中。新の被熱痕 (スリ方)	外面に焼成後旧カマド壁の被熱痕 (スリ方)
	2	土師器 坪	口径: [12.6] 底径: — 器高: —	①酸化焼成 (良好) ②外: 褐色、内: 明赤褐色 ③石英、長石、黒色粒、白色粒 ④口縁部~体部破片	外: 口縁部ヨコナデ。体部ナデ後手持ち磨ケズリ。 内: 口縁部~体部下位ヨコナデ。	掘り方	
	3	須恵器 坪	口径: 13.4 底径: 5.5 器高: 4.2	①還元焼成 ②外内: 灰灰色 ③多量の石英、片岩、凝灰岩粒 ④ほぼ完形	外: ロクロ整形 (右回転)。底部回転糸切後無調整。 内: ロクロ整形。	床面直上	内外面に重ね焼き痕。
	4	須恵器 坪	口径: [13.9] 底径: 7.5 器高: 3.4	①還元焼成 (良好) ②外: 暗灰色、内: 灰黄色 ③石英、チャート、赤色粒、白色粒 ④口縁部~体部1/2、底部完形	外: ロクロ整形 (右回転)。底部回転糸切後無調整。 内: ロクロ整形。	床面直上	
	5	須恵器 坪	口径: [13.3] 底径: 6.1 器高: 4.3	①還元焼成 (不良) ②外内: 灰黄色 ③石英、多量の片岩、赤色粒、黒色粒 ④口縁部~体部1/4	外: ロクロ整形 (右回転)。底部回転糸切後無調整。 内: ロクロ整形。	覆土下層	
	6	須恵器 坪	口径: [13.7] 底径: 6.4 器高: 4.1	①還元焼成 ②外内: 灰色 ③石英、白色粒 ④口縁部~底部破片	外: ロクロ整形 (右回転)。底部回転糸切後無調整。 内: ロクロ整形。	覆土下層	外面に重ね焼き痕。
	7	須恵器 高台付埴	口径: 14.7 底径: 7.4 器高: 6.2	①還元焼成 ②外内: 灰白色 ③多量の石英、白色粒 ④ほぼ完形	外: ロクロ整形 (右回転)。底部回転糸切後高台貼付 (周縁部調整)。 内: ロクロ整形。	床面直上	内外面に焼成後の被熱痕 (磨げ、スリ方)。
	8	須恵器 高台付埴	口径: [14.6] 底径: 7.4 器高: 5.3	①酸化焼成 (還元不良) ②外: にぶい黄褐色、内: にぶい褐色 ③石英、片岩、赤色粒、黒色粒 ④口縁部~体部1/2、底部9/10	外: ロクロ整形 (右回転)。底部回転糸切後高台貼付 (周縁部丸棒状工具による調整)。 内: ロクロ整形。	覆土下層	
	9	須恵器 高台付埴	口径: [16.05] 底径: 7.55 器高: 5.6	①還元焼成 (良好) ②外内: 灰白色 ③石英、凝灰岩粒、赤色粒、黒色粒 ④口縁部~体部1/2、底部ほぼ完形	外: ロクロ整形 (右回転)。底部回転糸切後高台貼付。 内: ロクロ整形。	覆土下層	
	10	須恵器 高台付埴	口径: — 底径: 7.4 器高: —	①還元焼成 (やや不良) ②外内: 灰色 ③石英、角閃石、黒色粒 ④底部完形	外: ロクロ整形 (右回転)。底部回転糸切後高台貼付。内: ロクロ整形。	覆土下層	
	11	須恵器 高台付埴	口径: — 底径: 7.6 器高: —	①還元焼成 (やや不良) ②外: にぶい褐色、内: 灰色 ③石英、多量の片岩 ④底部完形	外: ロクロ整形。底部回転糸切後高台貼付。内: ロクロ整形。	覆土下層	
	12	須恵器 皿	口径: 14.4 底径: 7.3 器高: 2.3	①還元焼成 (良好) ②外内: 灰色 ③石英 ④ほぼ完形	外: ロクロ整形 (右回転)。底部回転糸切後高台貼付。 内: ロクロ整形。	床面直上	内面に径6.7cmの重ね焼き痕。
	13	須恵器 皿	口径: [14.5] 底径: 7.3 器高: 2.7	①還元焼成 (普通) ②外内: 灰色 ③石英、凝灰岩粒、黒色粒 ④5/6	外: ロクロ整形 (右回転)。底部回転糸切後高台貼付。 内: ロクロ整形。	床面直上	内外面に焼成後の被熱痕 (外面スリ方)。
	14	灰釉陶器 皿	口径: [17.6] 底径: 8.1 器高: 3.3	①還元焼成 (良好) ②外内: 灰白色 ③石英、黒色粒、白色粒 ④口縁部~体部1/2、底部完形	外: ロクロ整形 (右回転)。体部下端~底部回転磨ケズリ後高台貼付 (周縁部調整)。灰釉ハケ塗り。 内: ロクロ整形。灰釉ハケ塗り。	床面直上	
	15	灰釉陶器 皿	口径: [18.1] 底径: — 器高: —	①還元焼成 (良好) ②外: 灰白色、内: 淡黄色 ③黒色粒、白色粒 ④口縁部~体部中位1/6	外: ロクロ整形 (右回転)。体部下位回転磨ケズリ。 内: ロクロ整形。灰釉ハケ塗り。	覆土下層	
	16	灰釉陶器 瓶類	口径: — 底径: [5.8] 器高: —	①還元焼成 (良好) ②外: 灰白色、内: 灰黄色 ③黒色粒、白色粒 ④底部2/3	外: ロクロ整形 (右回転)。体部下位回転磨ケズリ。灰釉ハケ塗り。 内: ロクロ整形。灰釉ハケ塗り。	床面直上	
	17	土師器 甕	口径: [20.2] 底径: — 器高: —	①酸化焼成 (良好) ②外内: 褐色 ③石英、雲母、角閃石、赤色粒、黒色粒 ④口頸部ほぼ完形、胴部破片	外: 口縁部ヨコナデ後胴部磨ケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ後頸部~胴部磨ナデ。	カマド 煙道	逆位埋設。

第3表 出土遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	法量 (cm)	①焼成②色調 ③胎土④残存	成・整形技法の特徴	出土位置	備考
S I - 1	18	須恵器 壺	口径: 一 底径: 一 器高: 一	①還元焼成(良好) ②外内: 灰色 ③多量の石英 ④剥部片	外: 平行タタキ。 内: 無文の当て具板。	覆土中	内外面に顕著な摩耗。
	19	磨石	長さ: (21.9)、幅: 20.7、厚さ: 6.0、重さ: 4340g。石材: 閃緑岩。表裏面に顕著な摩耗痕・砥ぎ痕。表裏面の下部・破断面に顕著な被熱痕跡あり。			貯蔵穴下層	カマド構築材か。
	20	磨石	長さ: (5.1)、幅: (4.5)、厚さ: 2.9、重さ: 69.28g。石材: 粘板岩か。表裏面に摩耗痕(裏面は顕著)。			カマド 覆土中	
	21	鉄製品 刀子	長さ: (6.4)、幅: 1.6、厚さ: 0.3、重さ: 9.15g。			覆土中	
	22	鉄製品 鎌	長さ: (3.9)、幅: (2.3)、厚さ: 0.3、重さ: 4.88g。			覆土中	
	23	鉄製品 釘	長さ: (7.5)、幅: 0.7、厚さ: 0.5、重さ: 5.96g。			覆土中	
S I - 2	1	須恵器 坪	口径: 13.3 底径: 6.7 器高: 3.3	①還元焼成 ②外内: 灰白色 ③石英、 黒色粒、多量の白色粒 ④7/8	外: ロクロ整形(右回転)。底部回 転糸切後無調整。 内: ロクロ整形。	床面直上	
	1	須恵器 坪	口径: (13.7) 底径: 6.6 器高: 3.7	①還元焼成 ②外内: 灰白色 ③石英、 黒色粒 ④口縁部~体部1/4、底部ほぼ 完形	外: ロクロ整形(右回転)。底部回 転糸切後無調整。 内: ロクロ整形。	覆土中	内外面に焼成 後の被熱痕(ス ス付着)。
S I - 3	2	須恵器 高台付埴	口径: (16.4) 底径: 6.6 器高: 一	①酸化焼成(還元不良) ②外内: 外 に黄褐色 ③石英、褐色粒、黒色粒 ④1/4	外: ロクロ整形(右回転)。底部回 転糸切後高台貼付(周縁部調整)。 内: ロクロ整形。	覆土下層	
	3	須恵器 坪	口径: 一 底径: (8.1) 器高: 一	①還元焼成(良好) ②外内: 灰白色 ③石英、黒色粒 ④底部破片	外: ロクロ整形。底部回転糸切後 無調整。 内: ロクロ整形。	覆土中	底部外面に墨 書。
	4	土師器 坪	口径: 一 底径: 一 器高: 一	①良好 ②外内: 明赤褐色 ③石英、 灰色粒 ④底部破片	外: 手持ち篋ケズリ。 内: ヨコナデ・ナデ。	覆土中	底部外面に墨 書。
	1	須恵器 坪	口径: (13.0) 底径: 6.0 器高: 4.4	①還元焼成(良好) ②外: 灰色、内: 灰オリーブ色 ③石英、長石 ④口縁 部~体部1/2	外: ロクロ整形(右回転)。底部回 転糸切後無調整。 内: ロクロ整形。	覆土中	外面に重ね焼 き痕。
S I - 4	2	土師器 坪	口径: 一 底径: 一 器高: 一	①還元焼成(良好) ②外内: 褐色 ③石英、白色粒、灰色粒 ④底部破片	外: 手持ち篋ケズリ。 内: ヨコナデ・ナデ。	掘り方	底部内部に墨 書。
	3	土師器 坪	口径: 一 底径: 一 器高: 一	①還元焼成(良好) ②外内: 褐色 ③石英、黒色粒 ④口縁部破片	外: 口縁部ヨコナデ後体部手持ち 篋ケズリ。 内: 口縁部ヨコナデ後体部に放射 状のミガキ(確文)。	覆土中	
	4	鉄製品 釘	長さ: (12.6)、幅: 0.9、厚さ: 0.8、重さ: 27.88g。角釘。			床面直上	
遺構外	1	土師器 坪	口径: 一 底径: 一 器高: 一	①還元焼成(良好) ②外内: 赤褐色 ③石英、雲母 ④底部破片	外: 手持ち篋ケズリ。 内: ナデ。	調査区一掃	底部内外面に 墨書。
	2	緑釉陶器 椀	口径: 一 底径: 一 器高: 一	①還元焼成(良好) ②外内: 灰白色 (素地) ③黒色粒 ④体部破片	外: ロクロ整形。緑釉(洗緑色)。 内: ロクロ整形。器底部に1条の 横位比線。緑釉(洗緑色)。	S D - 1 覆土上面	

【主な引用・参考文献】

五十嵐 五・太田和隆 1980 『菅谷遺跡発掘調査報告』群馬県群馬町教育委員会
伊藤明一 2018 『まのめ』『小八木葉研寺遺跡』高崎市教育委員会
神谷佳男・横崎修一郎 2003 『菅谷石塚遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
古代交通研究会 2004 『日本古代道路事典』八木書店
坂井 隆・宮崎重雄 2001 『小八木志志良戸遺跡群3 中世編』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
沢口 宏 1995 『地形・地質』『群馬町誌』資料編4 自然 群馬町誌編集委員会
群馬町誌編集委員会 1998 『群馬町誌』資料編1 原始古代 中世
群馬町誌編集委員会 2001 『群馬町誌』通史編上 原始古代 中世・近世
早田 勉 1990 『群馬県史』群馬県史 通史編1 原始古代1

群馬県史編さん委員会
早田 勉 2018 『付録 自然科学分析』『小八木葉研寺遺跡』高崎市教育委員会
高崎市史編さん委員会 1996 『新編高崎市史』資料編3 中世1 高崎市田辺芳昭 2008 『棟高遺跡群 棟高本庄Ⅱ・棟高辻のⅣⅤ遺跡』高崎市教育委員会
田辺芳昭 2015 『菅谷遺跡群1』高崎市教育委員会
水谷貴之 2011 『遺跡の地理的・歴史的環境』『菅谷・村東遺跡4』高崎市教育委員会
宮田忠洋・吉田有田 2011 『菅谷・村東遺跡』高崎市教育委員会
山崎 一 1972 『群馬県古墳群址の研究』下巻 群馬県文化事業振興会
若狭 徹 1987 『推定東山道』群馬県群馬町教育委員会
高井邦男・神谷佳男・板岡正信 1992 『群馬県における灰釉陶器の様相について』(1)『研究紀要9』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

写 真 図 版



調査区 遠景（北東から）



調査区全景（上が北東）



調査区全景（北西から）



S1-1・S1-4全景（西から）



S1-1 遺物出土状態全景（西から）



S1-1・S1-4掘り方全景（西から）



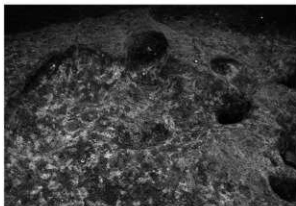
S1-1 遺物出土状態近景（南から）



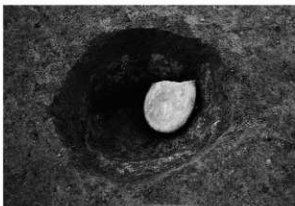
S1-1 新カマド全景（西から）



S1-1 新カマド構築材検出状態（西から）



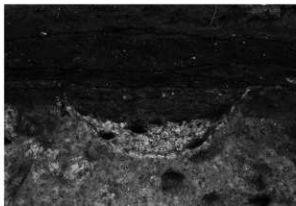
S1-1 旧カマド掘り方全景（西から）



S1-1 貯蔵穴全景（東から）



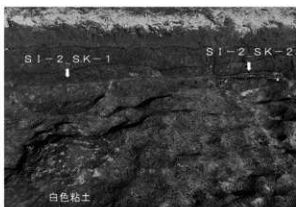
S1-2 全景・遺物出土状態 (西から)



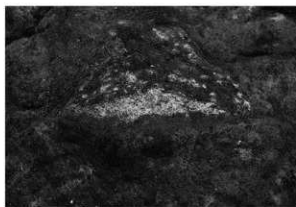
S1-2_SK-1 全景 (西から)



S1-2_SK-2 全景 (西から)



S1-2 掘り方白色粘土検出状態 (西から)



S1-2 白色粘土スち割り状態 (西から)



S1-3 全景・遺物出土状態 (西から)



SD-1 全景 (南西から)



SD-1 土層断面B-B' (北東から)

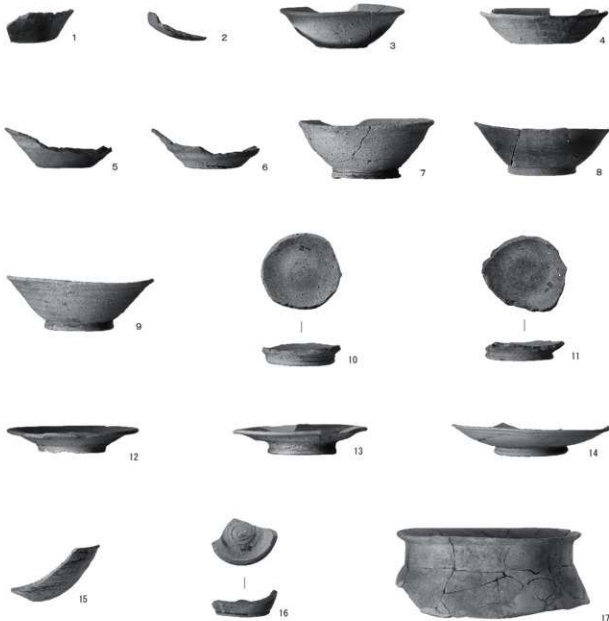


SK-1 全景 (西から)



基本層序B (北西から)

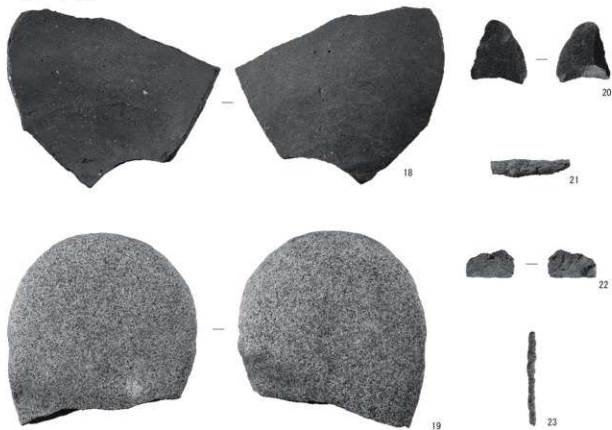
SI-1 (1)



出土遺物 (1)

SI-1 (2)

PL. 5



SI-2



SI-3



SI-4



遺構外



出土遺物 (2)

報告書抄録

フリガナ	スガヤムラマエイセキ
書名	菅谷村前遺跡
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第433集
編著者名	春里桃子
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所 〒379-2146 群馬県前橋市公田町1002番地1 Tel 027-265-1804
発行機関	有限会社 毛野考古学研究所
発行年月日	令和元年5月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
菅谷村前遺跡	群馬県高崎市 菅谷町字村前 779番地、886 番地	10202	750	36° 22' 25"	139° 00' 44"	20181022 20181109	60㎡	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
菅谷村前遺跡	集落	古墳時代～平安時代	土坑	1基	
		平安時代	竪穴建物跡	4軒	
		A s - B 降下以降 (近世か)	溝	1条	
		時期不明	ピット	2基	

高崎市文化財調査報告書第433集

菅谷村前遺跡

一宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査一

令和元年5月24日印刷

令和元年5月31日発行

編集／有限会社 毛野考古学研究所
発行／有限会社 毛野考古学研究所
印刷／朝日印刷工業株式会社